

変わる日本の「暮らし」と「まち」

多世代が交流し、生き生きと暮らす
団地再生の試み

多摩平団地(多摩平の森)
団地再生事業
(1997年・平成9年)

阿部民子 text by Tamiko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

初夏の日差しを浴びて、空に向かつて伸びるトウモロコシの苗。ナスの葉陰にはツヤツヤの実がなり、トマトは黄色い花を咲かせている。ここ「シェア畑 多摩平 ひだまりファーム」は、最近人気の都市型貸し菜園だ。場所は、JR中央線豊田駅から徒歩約10分。60区画ある菜園では、思い思いの野菜が元気に育っている。

取材当日は、ちょうど会員向けの講習会開催日。アドバイザーの宇賀神康夫さんが夏野菜の育て方を講義し、菜園では実際に支柱の

立て方などを丁寧に教えていた。

「会員さんは20代から70代までと幅広いですね。一番多いのは子育て世代。食育になるし、無農薬・有機栽培で安心でしょう。野菜嫌いのお子さんが野菜を食べてくれるようになったなんて声も聞きますよ」と宇賀神さん。

菜園で作業をしていた藤本多美子さんは、東村山市から約1時間かけて週に1、2回ほど通っているという。「今年の4月から始めて、もうレタスやナスを収穫しました。自分で育てた野菜の味は格

別ですね。これからはエダマメが楽しみ！」と声を弾ませる。3年

目になるという70代の女性も「土をいじっていると無心になれるのがいいんです。子どもたちも収穫を兼ねて遊びに来るし、とにかく野菜の味が全く違うんですよ」と教えてくれた。

住民の声を活かしたまちづくり

じつは、この「ひだまりファーム」があるのは、もとは多摩平団地という約30ヘクタールに及ぶ広大な団地だった場所だ。多摩平団地は、昭和30年代の高度経済成長期の住宅不足を解消するために建



最寄りの駅から徒歩約10分の団地の中で、さまざまな野菜を栽培できる取り組み

設。中央線始発の豊田駅から徒歩圏内という立地と、緑が多い環境などで人気を集めた。平成9年からは、時代のニーズに合わせたより暮らしやすい住まいへと順次建て替えを開始し、平成20年に完了。また、江戸時代には幕府の鷹狩場であり、大正時代は宮内省の御料林だった敷地内の森にちなみ、新しい団地の名称を「多摩平の森」と名付け、名実ともに新たなまちに生まれ変わった。

団地再生を推進してきたURの山内広美は「団地再生にあたっては、敷地内の一部をUR賃貸住宅として高層化して集約しました。そこで生じた約18ヘクタールの余剰地に公共施設や商業施設、生活利便施設を誘致して、歩いて暮らせるまちづくりを目指しています。ここでの再生事業の特徴は、日野市さんと団地自治会の皆さん、そしてURの三者で勉強会を開いて建て替えやまちづくりなどを話し合い、合意形成して進めていること。新しいまちは、その声を活かして作られています」と説明する。住民の声を聞いて作られたまちは、大型スーパーやシヨッ

ピングモール、保育園や図書館、児童館のほか医療機関も充実。暮らしの利便性がさらに高まった。

前述の「ひだまりファーム」は、これら団地再生の一環としてURが行った「住棟ルネッサンス事業」と呼ばれる試みの1つだ。建て替えによって空家となった5棟を、公募で選ばれた民間の3事業者がURから借り受けて個性豊かな住まいへとリノベーション。運営も同時に担う。既存の建物を活かしながら、多世代が暮らすコミュニティの場を作るのが狙いだ。

「ひだまりファーム」があるのが、5棟のうち1棟の「AURA243 多摩平の森」だ。野菜作りに関心が高い若い夫婦やシニア夫婦をターゲットにしたもので、「ひだまりファーム」のほか、デンマークの人々が週末に楽しむ郊外型家庭菜園「コロニエーブ」に発想を得た貸し庭や、イベントを開催できる「AURAハウス」を併設。住棟は1階に専用庭を設けて室内も木を基調にし、リビングを広くするなどの改装をほどこした。

そのほか、学生や若い社会人をターゲットにしたシェアハウス

「りえんと多摩平」が2棟、生活支援サービス付き高齢者向け住宅を含む高齢者向け賃貸住宅「ゆいまる多摩平の森」が2棟。計5棟が建つ街区は「たまむすびテラス」と名付けられ、完成翌年の平成24年にはグッドデザイン賞も受賞。それぞれ空き物件が出ないほどの人気になっている。

毎年春には街区全体で「さくら祭り」を開催し、多摩平の森の団地住民なども参加。団地の夏祭りには「たまむすびテラス」の住民がお手伝いするなど、相互に行き来し、多世代が交流する新たなコミュニティの場が誕生した。

多世代が交わる新しいまち

平成9年から始まった団地再生事業も既に22年が経過。今年4月には「たまむすびテラス」に隣接する「多摩平の森」で、てラス」が完成。既に利用が始まっていた健康増進複合施設や病院、医師会館、認可保育園などに加え、社会教育センターと特別養護老人ホームが新たにオープン。事業もそろそろ終盤を迎える。それにつれ、URの役割も少し

ずつ変わってきた、と山内は話す。「当初は、新しく地域に入ってくる事業者さんと、団地にお住いの方との交流の仕方を考えたり、事業者さん同士をつなぐお手伝いをしていました。最近では、事業者さんが自主的に地域連携や交流イベントを開催することも増え、うれしい反面、ちよつぱりさびしい気も。子離れされた親の心境でしょうか(笑)。また、ここでは多摩平団地時代から自治会や地域に係わる方々の活動が活発で、まちの魅力を高めていると感じます。そういう方がいらっしやるまちは安心ですし、自分も住みたいまちですね」

豊かな緑やゆとりある住空間など既存の財産を活かしながら、学生から子育て世代、高齢者まで、さまざまな世代が交流し、安心して生き生きと暮らせるミクスドコミュニティ。多摩平の森には、その理想形の1つがあるようだ。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作]新潮社